報告二

ティムール朝における学芸保護と学知

―イスカンダル・スルターンの『傑作集』を中心に―

大塚　修

一　はじめに

ペルシア語文化圏で作成された手稿本群の中には、サフィーナ safīna、マジュムーア majmūʿa、ジュング jung、グルチーン gulchīn などの呼称で呼ばれる文献類型が存在する。これらは一般的に、複数の著者による様々な分野の作品（その抜粋や縮約版をも含む）を、韻文と散文の別を問わずに一つにまとめた「傑作集（アンソロジー）」と同義の言葉として用いられている（一方で、一人の著者の作品をまとめたものに対しては、ディーワーン dīwān やクッリヤート kulliyāt などの呼称が用いられる）[1]。傑作集を作成するに際して、その中にどのような分野の作品を収録するのか、その分野の作品の中からどの作品を収録するのか、抜粋を収録する作品についてはその中のどの部分のテクストを収録するのか、また、収録する作品をどのような順番で並べるのか、などの点においては、注文者や製作者の意向が反映されることになる。そこからは、その傑作集が作成された時や場所における手稿本文化の様相、そして、学知の在り方の一端を確認することができるのである。

傑作集の注文者が時の権力者であった場合、しばしばそ

の外形的な面において趣向が凝らされた。紙や装丁には豪華絢爛な装飾が施され、時に絵画が挿入されることもあり、その作例の一部は、これまでに美術史家たちの研究対象となってきた。ただしその多くは、装飾、絵画、装丁といった外形的な分析や評価に特化したもので、傑作集の内容そのものが研究対象とされる事例は少なかった。一方で、文献学者たちは、傑作集に含まれる個々の一つ一つの作品を研究対象とすることはあっても、傑作集そのものを全体で一つの作品として分析しようとは試みてこなかった。これは、研究姿勢の問題というよりも、そもそも傑作集全体の翻刻や影印本が出版される事例が少なく、その全体像を分析するには、その手稿本が所蔵されている図書館で調査を実施しなければならないなどといった史料利用の困難さに伴う問題でもあった。しかし、イルハーン朝（一二五六―一三五七）時代に作成された『タブリーズ傑作集 *Safīna-yi Tabrīz*』（一三二三年）の影印本が二〇〇三年に刊行された後に[2]、多くの注目を集め、収録される各作品についての分析がなされ、この傑作集の史料的価値を評価する成果が続々と刊行されたことからも明らかなように[3]、これまでに捨象されてきた傑作集という文献類型に属する手稿本群は、ペルシア語文化圏の歴史研究に対して新しい史料的可能性を提供してくれるものと言えるだろう。

以上のような問題意識を背景として、本稿では、現存する傑作集の手稿本群の中から、ティムール朝（一三七〇―一五〇七）の王子イスカンダル・スルターン（一三八四―一四一五）のために作成されたペルシア語傑作集を取り上げたい。その分析を通して、彼が行った学芸保護の実態、そして、彼が必要とした、あるいは彼に必要だと考えられた学知の在り方を明らかにしていく。ムスリム諸王朝の君主による学芸保護を論じる際に、その象徴的な事例としてしばしば紹介されてきたのが、ティムール朝の君主たちである。大規模な歴史編纂事業を行った第三代君主シャー・ルフ（在位一四〇九―四七）と彼の息子バーイスングル（一四三三没）、天文台の建設で知られる第四代君主ウルグベク（在位一四四七―一四四九）、ヘラート政権の君主としてホラーサーン地方を支配し、多くの学者や芸術家を保護したフサイン・バイカラ（一四七〇―一五〇六）などの名前は、王朝が主導した学芸保護の代表例として広く知られている[4]。そして、これらの君主たちの名前に並んで、ティムール朝における学芸保護について論じる際に欠かせないのが、王子イスカンダル・スルターンの名前である。彼のために作成されたホロスコープ（図一）は、しばしば概説書の口絵を飾り、ティムール朝における学芸保護の成果を代表する作品として、また、当時のシーラーズ派美術を

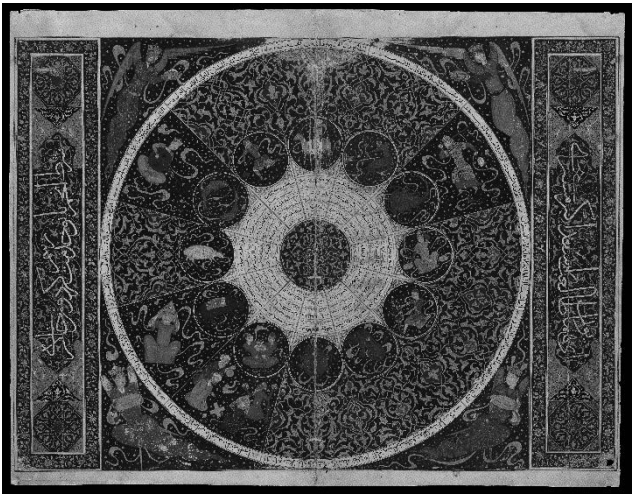


図１：イスカンダル・スルターンのホロスコープ
（ロンドン Per474 本 fols. 18b–19a）
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/9/94/Horoscope_from_the_book_of_the_birth_of_Iskandar_Wellcome_L0015229.jpg

象徴する作品として高く評価されてきた[5]。

じつは、このホロスコープは、イスカンダルに献呈された傑作集に含まれていたものだと考えられている。その傑作集を構成していた手稿本の大部分は現在、リスボンのグルベンキアン博物館に所蔵されている。この博物館は、所蔵する手稿本の目録を刊行しておらず、そのために、その傑作集の内容については長い間、学界では共有されてこなかった。このような研究環境の中、一九九二年、美術史家 P. P. Soucek がその内容の詳細を紹介し、その後、二〇二一年には、M. Ghiyāthiyān と I. Sturkenboom がより詳細にこの手稿本の形状と中身を紹介した。しかし、両研究の関心は、同じく傑作集の装飾や絵画にあり、そのテクストについての本格的な分析は行われていない。これらの研究では、収録作品の比定作業も行われているが、実際にテクストを分析していないためか、その結論には不十分な点も散見される[6]。これらの問題に鑑みて、本稿では、筆者による手稿本調査の成果に基づきながら、傑作集の外形的な側面についてだけではなく、内容の詳細についての新たな知見を提供しながら論を進めていくこととする。美術史家 E. Wright が「先行するいかなるペルシア人の保護者の名前よりもイスカンダルの名前が入った手稿本の数の方が多い」と評価したように[7]、彼に献呈された手稿本の数は桁外れに多く、

傑作集だけでも複数種類現存している[8]。本稿では、全ての傑作集を扱うことはできないが、なるべく、その全体像を俯瞰できるように考察を進めていくことにする。

二　イスカンダル・スルターンの生涯と名声

叛乱者として生涯を終えた王子

イスカンダル・スルターンは、ティムール朝の開祖ティムール（在位一三七〇―一四〇五）の子ウマル・シャイフ（一三九四没）の息子として一三八四年に生まれた。一三九三年に父ウマル・シャイフがイラン高原南部ファールス地方の総督に任じられると、イスカンダルを含む彼の一族はファールス地方を拠点とするようになった。その後、一三九四年に父ウマル・シャイフが殺害され、兄ピール・ムハンマド（一四〇九没）がその職務を継承した。この間に弟のイスカンダルは一時、ティムールに反旗を翻し処罰されるも、ティムールのアナトリア遠征に参加するなど王朝の一員として活躍を見せ、一四〇三／四年には、イラン高原西部のハマダーンと小ロルの支配を任されている。

このようにティムールの統治下においては、ウマル・シャイフの息子たちがイラン高原の各地域を統治していたが、一四〇五年のティムールの没後、一族の間で勢力争いが激化する。この期間、イスカンダルはヤズドを拠点としつつ兄ピール・ムハンマドと争っていた。一四〇九年にピール・ムハンマドが近臣に殺害されると、イスカンダルは実力でファールス地方を獲得した。その後、イスカンダルは独立を志向し、ティムール朝第三代君主シャー・ルフとの対立を深めていく。シーラーズを中心にハマダーン、イスファハーン、ヤズド、キルマーンなどを支配していたイスカンダルは、一四一二／三年にイスファハーンに拠点を移し、建設事業にも着手した。しかし、一四一四年にシャー・ルフの軍勢によりイスファハーンは陥落し、彼は兄弟ルスタム（一四二四／五没）に預けられ、両眼を潰されてしまった。それでも、その数ヶ月後に再び叛乱を企図したが、捕縛されて殺害された[9]。

学芸保護者としての名声

叛乱者として亡くなった王子イスカンダルの生涯は三二年と短いものであったが、彼による学芸保護は現在極めて高く評価されている。一四〇九年から一四一四年にかけてファールス地方で権勢を極めたイスカンダルは、君主となったおじのシャー・ルフと覇権を競い合っていた。自らの支配の正当性を主張する一環として、多くの知識人を登用し、学芸活動を保護し、自らもそれに従事した。その結果、

同じく学芸活動を保護したシャー・ルフよりも広い知的関心を持っていたとまで評価されている。[10]またその背景には、一四一一年に滅亡した、バグダードを拠点とするジャラーイル朝（一三三六―一四一一）の人材がファールス地方に流入し、その文化的伝統を継承したという側面もあったとされる。[11]

『イラン大百科』では、彼の宮廷で活躍した学者として、①ムイーン・アッディーン・ナタンズィー Muʿīn al-Dīn Naṭanzī、②ギヤース・アッディーン・カーシー Ghiyāth al-Dīn Kāshī（一四二九頃没）、③マフムード・カーシー Maḥmūd Kāshī（生没年不詳）、④ブスハーク・アトイマ Busḥāq Aṭʿima（一四二三あるいは一四二七没）、⑤ミール・ハイダル Mīr Haydar（生没年不詳）という五人の名前が紹介されている。[12]①ナタンズィーはウラマーで、ダウラトシャー Dawlatshāh（一四九四あるいは一五〇七没）『詩人伝 *Tadhkirat al-Shuʿarā*』によれば、イスカンダルの伝記を執筆したとされる。[13]②ギヤース・カーシーは天文学者で、後述する『天文学の知識に関する梗概 *Mukhtaṣar dar ʿIlm-i Hayʾat*』をイスカンダルに献呈している。後に彼は、第四代君主ウルグベクに仕え、多くの著作を遺した。[14]③マフムード・カーシーも同じく天文学者で、ギヤース・カーシーの祖父だと考えられる。彼は、イスカンダルのホロスコープが含まれる後述する『吉兆なる誕生と暦 *Mawlūd-i Humāyūn wa Taqwīm*』の著者である。④ブスハーク・アトイマは、ダウラトシャー『詩人伝』によれば、イスカンダル・スルターンの宴席（マジュリス）の御側人（ナディーム）であったとされる。「食物」を意味する「アトイマ」という通称は、彼が様々な食物を詩に詠み込んだことに由来する。[15]⑤ミール・ハイダルは、ダウラトシャー『詩人伝』によれば、テュルク語とペルシア語で詩作を行い、ニザーミー Niẓāmī（一二〇九没）の『五部作 *Khamsa*』の第一部『神秘の宝庫 *Makhzan al-Asrār*』からの本歌取りをテュルク語で行い、イスカンダルに献呈したとされる。[16]

イスカンダルと関係を持ったその他の著名な知識人には、哲学者・科学者のシャリーフ・ジュルジャーニー Sharīf Jurjānī（一四一三没）、神秘主義教団ニウマト・アッラーヒー教団の開祖ニウマト・アッラー・ワリー Niʿmat Allāh Walī（一四三〇／一没）の二人がいる。さらにティムール朝史家 İ. E. Binbaş は、一四一二／三年の書簡に登場するイスカンダルの宮廷に集っていた知識人たちを、サイイド、宰相（ワズィール）、法官（カーディー）、学者（ウラマー）、伝承学者（ムハッディス）、法学者（ファキーフ）、天文学者（ムナッジム）、医者（タビーブ）、『クルアーン』（ハーフィズ）暗誦者、芸人（楽師、演奏家）、芸術家（フナルマンド）という九つの属性に分け、それぞれの名前を具体的に紹介している。[17]

また、イスカンダルは歴史書の編纂でも知られ、彼に献呈された『イスカンダル無名氏の史書 *Anonym Iskandar*』というペルシア語普遍史書が現在遺されている。この歴史書の中では、イスカンダルの統治の正当性が強く主張されており、彼は歴史書の編纂にも関心を持っていた。[18]

このようなイスカンダルによる学芸保護の様相を具体的に知ることができる手掛かりの一つが、本稿で分析対象とする傑作集である。彼の宮廷で作成され、彼に献呈されたと考えられる傑作集の手稿本が複数種類確認されている。

三　イスカンダル・スルターンに献呈された傑作集

現在、一四一一年から一四一三年の年記を持つ傑作集の手稿本の存在が確認されている。しかし、脱落があったり、複数の手稿本に切り離され、異なる図書館に分蔵されていたりと、その全体像を把握することは難しい状態にある。筆者も全ての手稿本を確認できているわけではないが、確認し得る限りの情報からは、イスカンダルに献呈された、あるいは献呈されたと考えられる傑作集の手稿本は次のように分類できる。

❶挿絵付大型傑作集

a. リスボン LA161 本（Gulbenkian Museum, Ms. LA161）[19]
四四一葉、二七・四×一七・二センチメートル、八一三年ズー・アルヒッジャ月（一四一一年三／四月）、マフムード・ブン・ムルタダー・ブン・アフマド・ハーフィズ・フサイニー Maḥmūd b. Murtaḍā b. Aḥmad al-Ḥāfiẓ al-Ḥusaynī、ハサン・ハーフィズ Ḥasan al-Ḥāfiẓ により書写。韻文と散文の傑作集。[20]

b. ロンドン Per474 本（Wellcome Institute, Ms. WMS. Per. 474）[21]
八六葉、二六・五×一七センチメートル、八一三年ズー・アルヒッジャ月二二日（一四一一年四月一八日）、マフムード・ブン・ヤフヤー・ブン・ハサン・ブン・ムハンマド Maḥmūd b. Yaḥyā b. al-Ḥasan b. Muḥammad（通称イマード・ムナッジム・カーシー ʿImād al-Munajjim al-Kāshī、前出のマフムード・カーシー）による著者直筆の『吉兆なる誕生と暦』。

c. イスタンブル F1418 本（Istanbul University Library, Ms. F1418）[22]
二四五葉、二六・六×一八センチメートル、八一四年サファル月一七日（一四一一年六月一〇日）書写。散文の傑作集。

❷挿絵付小型傑作集

ロンドン Add27261 本（British Library, Ms. Add. 27261）[23]

五四六葉、一八・四×一二・七センチメートル、八一四年第二ジュマーダー月（一四一一年九／一〇月）、ムハンマド・ハルワーイー Muḥammad al-Ḥalwāʾī とナースィル・カーティブ Nāṣir al-Kātib により書写。散文と韻文の傑作集。

❸挿絵無小型傑作集

a. リスボン LA158 本（Gulbenkian Museum, Ms. LA158）[24]

一八・三×一二・六センチメートル、八一六（一四一三／四）年、ハサン・ハーフィズ Ḥasan al-Ḥāfiẓ により書写。韻文の傑作集。

b. イスタンブル TIEM2044 本（Museum of Turkish and Islamic Arts, Ms. 2044）[25]

八一六年サファル月一三日（一四一三年五月一五日）書写。韻文の傑作集。

❹挿絵無大型傑作集

イスタンブル A3857 本（Süleymaniye Library, Ms. Ayasofya 3857）[26]

七五四葉、二五・五×一六・九センチメートル、八一六年第二ジュマーダー月（一四一三年八／九月）書写。韻文の傑作集。

❺イスカンダル・スルターンに献呈されたと考えられる挿絵付傑作集

a. ロンドン Or2780 本（British Library, Ms. Or. 2780）[27]

二四三葉、二五・四×一六・五センチメートル、八〇〇年サファル月（一三九七年一〇／一一月）、ムハンマド・ブン・サイード・ブン・アブド・アッラー・カーリー Muḥammad b. Saʿīd b. ʿAbd Allāh al-Qārī により書写。韻文の傑作集。

b. ダブリン P114 本（Chester Beatty Museum, Ms. P. 114）[28]

二二九葉、二五・八×一六・八センチメートル、フィルダウスィー Firdawsī（一〇二五没）『王書 *Shāh-nāma*』の手稿本で、もともとはロンドン Or2780 本と一揃いだったと考えられる。

c. テヘラン M5932 本（Malek Library, Ms. 5932）[29]

一三八葉、一三・一×八・八センチメートル、一四〇五年、おそらくヤズド[30]でクトゥブ・アッディーン・マフムード Quṭb al-Dīn Maḥmūd により書写。韻文の傑作集。

d. イスタンブル H796 本（Topkapı Palace Library, Ms. Hazine 796）[31]
二八九葉、二六×一八センチメートル、八一〇年第一ラビーウ月（一四〇七年八／九月）、ヤズドで書写。韻文の傑作集。

e. ラーンプル P742 本（Raza Library, Ms. (Old) P.742）[32]
四五二頁、一二・四×八・三センチメートル、一四一〇年頃、シーラーズでナースィル・カーティブ・シーラーズィー Nāṣir al-Kātib al-Shīrāzī により書写。韻文の傑作集。

f. イスタンブル B411 本（Topkapı Palace Library, Ms. Bağdad Köşkü 411, fols. 138b–166a）[33]
四八×三五・五センチメートル、八一六年第一ラビーウ月二一日（一四一三年六月二一日）、イスファハーンで書写。散文の傑作集。イスカンダルのために作成されたと考えられる傑作集の一部がシャー・ルフの手に渡り、彼のアルバムに組み込まれたもの。

イスカンダルの学芸保護に帰せられる傑作集の中で、彼に対する献呈書であると断定できるのは❶〜❹の傑作集である（本稿では、これらの傑作集の手稿本を、挿絵の有無と大きさといった形状から、便宜的に、❶挿絵付大型傑作集、❷挿絵付小型傑作集、❸挿絵無小型傑作集、❹挿絵無大型傑作集という名称を当てた）。これらの傑作集の手稿本には、献呈対象者であるイスカンダルの名前が明記されているからである（❸挿絵無小型傑作集については、イスタンブル TIEM2044 本にイスカンダルの名前が確認できるとされるが[34]、筆者未確認）。例えば、❶挿絵付大型傑作集の本文冒頭の二つ目の見開き頁の豪華装飾の中には、「おお神よ、偉大なるスルターン Sulṭān al-Aʿẓam、最も公正なハーカーン al-Khāqān al-Aʿdal、アラブとアジャムのスルターンたちの中のスルターン Sulṭān Salāṭīn al-ʿArab wa al-ʿAjam、地上における神の影 Ẓill Allāh fī al-Araḍīn、水と土の勇者 Qahramān al-Mā' wa al-Ṭīn、偉大なる王者（神）を信頼するもの al-Wāthiq bi al-Malik al-Akbar、ジャラール・アッドゥンヤー・ワッディーン・イスカンダル Jalāl al-Dunyā wa al-Dīn Iskandar の治世を永遠のものとしたまえ」という祈願文が書き込まれている。同様の祈願文は、イスカンダルの名前に対する形容を変えた形で、❷挿絵付小型傑作集と❹挿絵無大型傑作集の冒頭の見開き頁においても確認できる[35]。

❶挿絵付大型傑作集のa、b、cの手稿本、❸挿絵無小型傑作集のa、bの手稿本はそれぞれ、もともとは一揃いの手稿本として作成されたものが、現在に到るまでに、切

り離されてしまったものだと考えられている。イスカンダルのホロスコープが含まれる『吉兆なる誕生と暦』の手稿本ロンドン Per474 本[36]も、傑作集の一部であったとされる[37]。

❶～❹の傑作集は、イスカンダルがファールス地方を支配していた期間のうち、一四一一年から一四一三年にかけての短い期間で作られたものであるが、それぞれが異なる特徴を有している。手稿本の規格、挿絵の有無といった形式上の差異から、収録する作品の内容の違いに到るまで、様々な点で違いが確認できる。本稿では深く立ち入らないが、どのような経緯で複数種類の傑作集が作成されることになったのかという点も考察しなければならない問題であろう。

これらの傑作集の中で、韻文作品だけではなく散文作品も収録されているのが、❶挿絵付大型傑作集と❷挿絵付小型傑作集である。後者についてはその内容の詳細が早くから紹介され、学界で注目を集めてきた。挿入されている絵画の紹介と解説だけではなく、その構成と内容について、一八九五年に出版された英国博物館（現在は英国図書館に移管）のペルシア語手稿本目録で紹介され[38]、その後もしばしば分析対象とされてきた[39]。一方で、これよりも早い時期に作成され、規格も大きい❶挿絵付大型傑作集については、その大部分を含むリスボン LA161 本を所蔵するグルベンキアン博物館の手稿本目録が刊行されていないために、その内容が学界に共有されることはなかった。本稿では、これまでに内容について十分な検討がなされてこなかった、この❶挿絵付大型傑作集の分析を中心に、傑作集作成の歴史的意義について考察したい。

四　挿絵付大型傑作集の特徴

❶挿絵付大型傑作集の特徴は、本文冒頭の扉頁装飾（図二）が、目次になっている点である。見開き頁の左右それぞれの中央に位置するメダイヨン装飾を囲む四角い枠線の中に、左右それぞれに一九点ずつ、合計三八点の作品名が明記されている（稿末別表参照。読者の便を考慮して本稿では便宜的に、作品名の後に、この表で各作品に割り当てた番号を付した）。例えば、図三は、扉頁装飾の中に書き込まれた目次に登場する『選史 *Tārīkh-i Guzīda*』という史書名を拡大した部分である。見開き扉頁の右側の頁の目次には韻文の作品名が、左側の頁の目次には散文の作品名が記されているが、実際のテクストの内容もその構成にほぼ対応する形になっており、この手稿本の第一分冊には韻文作品のみが、第二分冊には散文作品のみが収録されている。

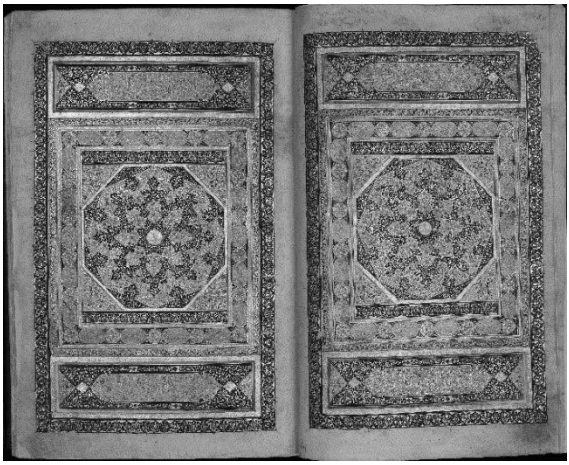


図２：リスボン LA161 本冒頭見開き頁（fols. 2b–3a）©Calouste Gulbenkian Foundation, Lisbon – Calouste Gulbenkian Museum, photos: Catarina Gomes Ferreira

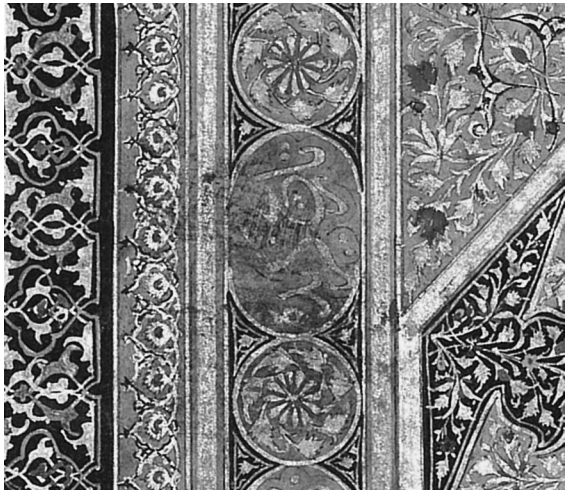


図３：リスボン LA161 本冒頭見開き頁を拡大した一部分（fol. 3a）©Calouste Gulbenkian Foundation, Lisbon – Calouste Gulbenkian Museum, photos: Catarina Gomes Ferreira

ただし、この形式は全ての傑作集に共通するものではなく、❷挿絵付小型傑作集では、韻文作品と散文作品が共存する形になっている。イスカンダルに献呈された傑作集の手稿本の中には、完全な形で残っているものは少なく、目次は、当初構想された内容を知る重要な手掛かりとなり得る。目次を使って傑作集の内容を明示する手法は、他の傑作集にも共通する様式で[40]、イスカンダルに献呈されたものでは、❹挿絵無大型傑作集の扉頁においても、装飾の様式こそ異なるものの、収録作品の目次を確認することができる[41]。

また、扉頁装飾の中には、イスラーム教の預言者ムハンマド（六三二没）と第四代正統カリフでシーア派初代イマームのアリー（六六一没）の名前が確認できる。その装飾では、小さい円の中の周囲にムハンマドの名前が四回繰り返して記され、円の中央にはアリーの名前が一回記される形でアリーが重要視されており、シーア派的傾向が確認できる。また、❷挿絵付小型傑作集では、ムハンマドとイマームたちに対する『頌詩集 *Qaṣāyid*』、シーア派第八代イマームのアリー・リダー（八一八没）の言行による『シーア派法学 *Fiqh dar Madhhab-i Shī'a*』が収録されるなど[42]、同様に、ファールス地方のイスカンダル宮廷におけるシーア派的思考が見え隠れしている。ちなみに、後者の『シーア派法学』のテクストが記された紙だけが、この手稿本の中で金色に塗られており[43]、特別視していることがうかがえる。

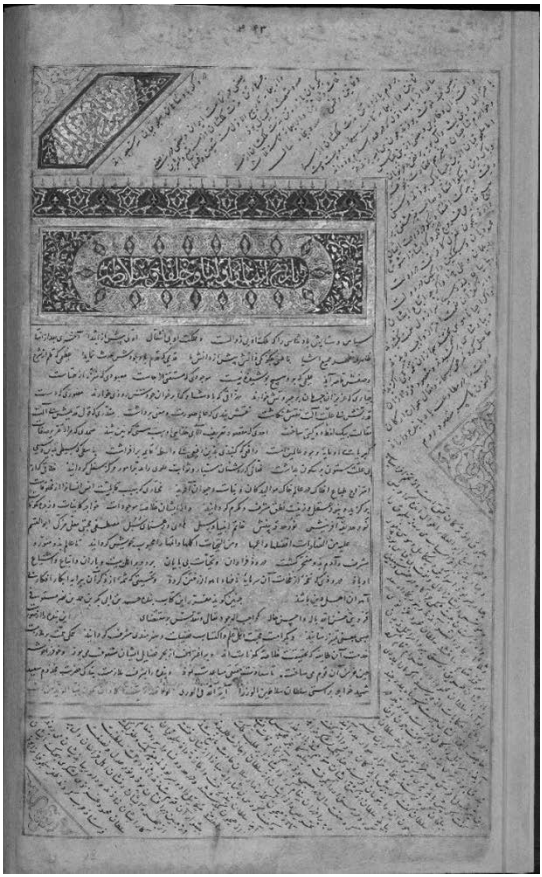
イスカンダルのために作成された傑作集のもう一つの特徴は、通常の多くの手稿本では何も書かれない欄外余白に斜め書きでテクストが記載されている点である（図四）。この欄外余白のテクストは、本文中のテクストとは関係なく、本文と欄外余白で独立した形で作品が収録されている。例えば、リスボン LA161 本の冒頭の本文は、ニザーミー『五部作』の縮約版、欄外余白はアッタール 'Aṭṭār『鳥の言葉 *Manṭiq al-Ṭayr*』の縮約版となっている[44]。同様の様式は、❹挿絵無大型傑作集を除く三つの傑作集でも採用されており、この時代に作成された手稿本の特徴の一つとなっている。

五　傑作集から浮かび上がる学芸保護と学知の様相

それでは、いよいよ傑作集の内容の詳細についての分析に移る。ここでは、❶挿絵付大型傑作集冒頭の目次で確認できる、三八タイトルの著作の内容について検討し、それに他の傑作集から読み取ることができる情報を補足しながら、イスカンダルの宮廷における学知の様相について考察していく。

❶挿絵付大型傑作集の一部であるリスボン LA161 本は、二つに分かれる形で製本されている。第一分冊には韻文作

品が、第二分冊には散文作品が収録されており、それは、前述の目次に概ね対応した形になっている。第一分冊に収録されている韻文作品は、様々な詩人による詩の作例を除いては、叙事詩という詩形で詠まれた作品になっている。



叙事詩は、全ての対句の半句それぞれの脚韻が互いに押韻していればそれでよいため、長文の文章を詩の形で詠むに際して好んで用いられる詩形である。例えば、頌詩は、最初の対句の半句の脚韻を互いに押韻させた上で、第二対句

以降の後半の半句の脚韻を最初の対句の脚韻と押韻させなければならないために、長文の詩を作詩しにくい。[45] 傑作集では、神秘主義詩をはじめとする様々な分野に属する事柄が叙事詩形で詠まれている。

史苑（第八三巻第二号）

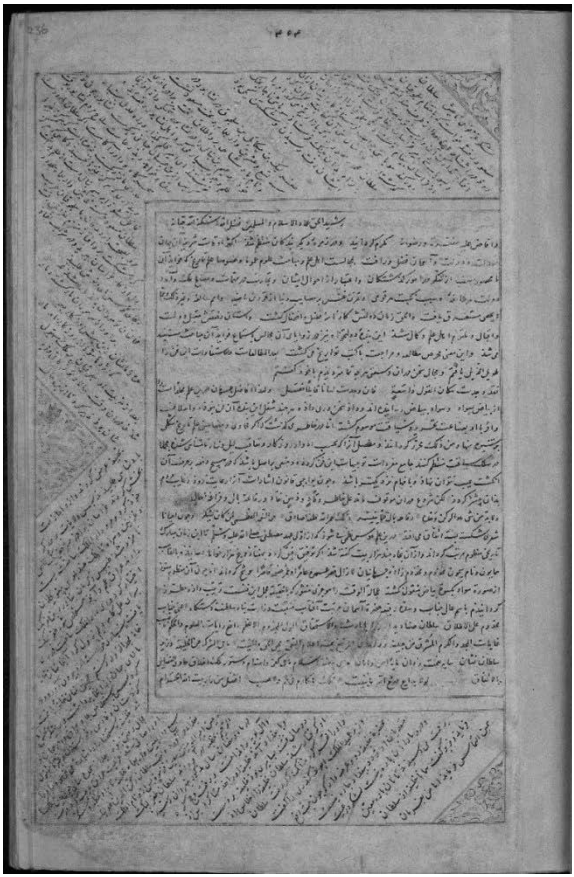


図４：リスボン LA161 散文の部の冒頭見開き（fols. 235b–236a）©Calouste Gulbenkian Foundation, Lisbon – Calouste Gulbenkian Museum, photos: Catarina Gomes Ferreira

長編叙事詩の教養

イスカンダルに献呈された傑作集には、神秘主義詩人が詠んだ長編叙事詩が好んで収録されている。❶挿絵付大型傑作集の本文冒頭に収録されているのは、神秘主義詩人ニ

ザーミー『五部作』[46]の縮約版【①】である。[47] ニザーミーの『五部作』は、その形は様々ではあるが、これ以外の傑作集の全てにおいても収録されており、その需要の高さがうかがえる。筆者が内容を確認できた❷挿絵付小型傑作集と❹挿絵無大型傑作集では、同じく冒頭部に収録されている。[48] なお、『五部作』を構成する第五の作品は、征服者、哲学者、預言者の性格を備えた存在としてイスラーム時代に英雄化された世界征服者アレクサンドロス大王（紀元前三二三没）を描いた『アレクサンドロスの書 *Iskandar-nāma*』である。[49] アレクサンドロスは、アラビア語ではイスカンダルと発音され、イスカンダル・スルターンの名前はまさにこの名前に由来する。英雄化されたアレクサンドロスにまつわる伝承が収録された『五部作』が重視されたのは、このことと無縁ではなかったであろう。

『五部作』の欄外余白には、アッタール（一二二一没）『鳥の言葉』[50]の縮約版【②】、そしてその後には、ルーミー Rūmī（一二七三没）『マスナウィー *Mathnawī*』[51]の縮約版【③】、アウハディー Awhadī（一三三八没）『恋人たちの言葉 *Manṭiq al-ʿUshshāq*』【④】[52]、サナーイー Sanāʾī（一一三四没）『真理の庭園 *Ḥadīqat al-Ḥaqīqa*』[53]の縮約版【⑥】が続く。元々短編であった『恋人たちの言葉』以外はいずれも縮約版になっている。これは今後の課題となるが、過去の名作がどのような形で縮約されているのかという点についての考察も、この時代の学知の様相を考える上では重要になってくる。これらの作品については、❷挿絵付小型傑作集には収録されていないものの、❹挿絵無大型傑作集には『真理の庭園』【⑥】以外の作品が同様に収録されている。[54]『五部作』ほどではないものの、これらの作品もイスカンダルに好まれていたようである。

その他に、フィルダウスィーによる英雄物語詩『王書』【⑨】の「グシュタースブ伝」も収録されている。[55] さらに、『独創的な思考 *Abkār al-Afkār*』【⑩】という題名の叙事詩も収録されている。この作品は、修辞学者ラーミー・タブリーズィー Rāmī Tabrīzī（一三九二／三没）により、一三七〇／一年にジャラーイル朝（一三四〇―一四三二）君主シャイフ・ウワイス（在位一三五六―七四）に献呈された『十章 *Dah Faṣl*』と内容が一致する。その内容はルーミーの『マスナウィー』を真似たものとなっている。[56]

叙事詩に詠まれた一般教養

傑作集の特徴として興味深いのは、以上の叙事詩の詩形で詠まれた主要な作品に加えて、一般教養にかかわる事柄が叙事詩の詩形で詠まれた作品が多数収録されている点である。旅行記を書き遺したことでも知られる、シーア派

イスマーイール派の教宣員ナースィル・フスラウ Nāṣir-i Khusraw（一〇八八？没）の『光明の書 *Rawshanāī-nāma*』【⑤[57]】は、教訓詩である。ファラーヒー Abū Naṣr Farāhī（一二二四二没）『若者たちの最小限度額 *Niṣāb al-Ṣibyān*』【⑦a[58]】は、「現存最古の韻文形式の辞典、また、アラビア語ペルシア語辞典の古い作例の一つ」と評価される、叙事詩形で綴られたアラビア語ペルシア語辞典である。この作品はペルシア語文化圏において、アラビア語の初等学習に使用され、絶大な人気を誇っていた。[59] もともとは二二〇対句だとされるが、中には六五〇対句になる版までもが現在伝わっており、多くの手稿本が作られた。[60] 例えば、この作品では「ペルシア語による月名」について、次のように詠われている。

ファルワルディーンを過ぎると、ウルディービヒシュトが到来する
フルダードとティールを過ごせ、そして、ムルダード
シャフリーワル、ミフル、アーバーン、アーザル、ダイの後には知りなさい
バフマンにはイスファンダールマズを除いて月が加わらないことを[61]

目次の七番目にはもう一つ、別の著作[62]、シャラフ・アッディーン・ブハーラーイー・フラーサーニー Sharaf al-Dīn Bukhārāī Khurāsānī（一三世紀）『礼拝入門 *Muqaddima al-Ṣalāt*』【⑦b】が挙げられている。この作品は、叙事詩形で綴られた礼拝の入門書で、『韻文型法学書 *Fiqh-i Manẓūm*』、あるいは『神の名 *Nām-i Ḥaqq*』などという書名でも知られる。[63] この作品は、イスカンダルに献呈されたと考えられる傑作集の一つテヘラン M5932 本の冒頭にも一一章構成で収録されている。[64] ❶挿絵付大型傑作集には、この作品の第一～三、九～一〇章が収録されている。例えば、第九章はラマダーン月の断食についての説明であるが、次のように始まる。

イスラーム法の規則を知っていれば、あってはならない
強い色欲にまみれている中で断食をすることは
飲酒と性交を遠ざけること
全ての食べ物を嫌うこと[65]

これに続いて収録されているのは、アブド・アルジャッバール・フジャンディー ʿAbd al-Jabbār Khujandī（一三世紀）『韻文型入門書 *Madkhal-i Manẓūma*』【⑧[66]】である。この作品は、一二一九／二〇年に成立した叙事詩形で綴られた天

文学の入門書で、❷挿絵付小型傑作集やテヘラン M5932 本にも収録されている。特にイスカンダルが好んで読んだ一冊だと考えられる[67]。彼の宮廷に仕えたブスハーク・アトイマが食物について詩に詠んだように、ここでは、様々な知識を韻文形式で詠うという営みがなされている。その一つの効用としては、覚えるべきことを詩の中に詠み込むことで暗記を助けるという側面があったということが指摘できるだろう。

この後、第一分冊の欄外の最後[68]に収録されているのが、サアディー Saʿdī（一二九二頃没）による散文教訓文学『薔薇園 *Gulistān*』[69]からの抜粋（序文の一部、第五章「恋愛と青春について」第二〇～二一話）【㊳】である。❶挿絵付大型傑作集の目次では、この部分は第二分冊散文の部の最後に位置付けられており、矛盾が生じている。先行研究ではここで生じている矛盾について説明がなされていないが[70]、これは、『薔薇園』が散文でありながら脚韻を揃える押韻散文形式をとっているために、韻文の部に収録したことによるものであると解釈したい。

ペルシア語詩の教養

第一分冊に収録されている以上の文献はいずれも叙事詩の詩形で綴られたものであったが、ペルシア語詩の詩形はそれだけではない。第一分冊の後半部分の本文と欄外余白にはその他の詩形で詠まれた、様々な詩人の代表的な詩が集められている（例えば、頌詩の冒頭部では、イラーキー ʿIrāqī（一二八九没）、アンワリー Anwarī（一一八七没）、スィラージュ・アッディーン・クムリー Sirāj al-Dīn Qumrī（一二二七／八没）の詩が紹介されている[71]）。この部分については具体的な著作名は記されず、詩形のみが記される形になっている（頌詩 Qaṣāyid【⑪、⑫】、抒情詩 Ghazaliyāt【⑬】、断片詩 Muqaṭṭaʿāt【⑮】、四行詩 Rubāʿiyāt【⑯】、単体詩 Mufradāt と謎かけ Muʿammayāt【⑰】）。この部分では唯一、『思考の極み *Natāyij al-Afkār*』の縮約版【⑭】という形で著作のタイトルが確認できるが、詳細は分からなかった。この著作も様々な詩人の名作の集成となっている[72]。

以上が❶挿絵付大型傑作集前半の韻文の部に収録されている諸作品であるが、決してペルシア語詩の教養を学ぶためだけのものではないことは明らかであろう。その中には、著名な詩を集めた箇所もあるが、王族に必要な教養について叙事詩の形で綴った箇所もある。

天文学の教養

❶挿絵付大型傑作集後半の散文の部の前半部は天文学

関係の作品で占められており、そのテクストは、イスタンブル F1418 本とロンドン Per474 本に保存されている。散文の部の本文部分の最初に配置されているのが、シャフマルダーン Shahmardān（一一世紀）『占星術師たちの庭園 *Rawḍat al-Munajjimīn*』（一〇七三／四年）【⑱】[73]とナスィール・アッディーン・トゥースィー Naṣīr al-Dīn Ṭūsī（一二七四没）『イルハーン天文表 *Zīj-i Īlkhānī*』【㉒】[74]である。『占星術師たちの庭園』は❷挿絵付小型傑作集にも収録され[75]、『イルハーン天文表』については、これとは別に、イスカンダルに対して一四一一年に献呈された独立した手稿本（Istanbul, Topkapı Palace Library, Ms. Ahmet 3513）も確認されており、この二作品の重要性がうかがえる。ちなみに、この手稿本の写字生は、リスボン LA161 本の写字生と同じマフムード・ハーフィズ・フサイニーである[76]。また、目次の二一番目に登場する『吉兆なる誕生と暦』【㉑】は、イスカンダルのホロスコープを含むイマード・ムナッジムの著作で、そのテクストも手稿本の本文部分にある。

これ以外の作品はすべて欄外余白に斜め書きされており、いずれも短編である。アラー・ムナッジム ʿAlā al-Munajjim（一三世紀）『年々の規則 *Aḥkām al-Aʿwām*』【⑲】、アフマド・ブン・アブド・アルジャリール・スィジュズィー Aḥmad b. ʿAbd al-Jalīl Sijzī（一〇二〇没）『推移の規則 *Aḥkām-i Taḥāwīl*』【⑳】、アリー・バクリー ʿAlī Bakrī（一三世紀）『才能の論証 *Burhān al-Kifāya*』【㉓】、無名氏『六十の表 *Jadwal-i Sittīnī*』【㉕】は、いずれも天文学に関する作品である。

目次には、これらの作品以外に、『ユークリッド *Uqlīdus*』【㉛】、『アルマゲスト *Majisṭī*』【㉜】、『規則 *Aḥkām*』【㉝】、『アブー・マアシャル *Abū Maʿshar*』【㉞】という天文学書とおぼしき作品名が確認できるが、テクスト部分が現存していないため、その詳細については不明である。ただし、❷挿絵付小型傑作集に『ユークリッドの知識に関する梗概 *Mukhtaṣar dar ʿIlm-i Uqlīdus*』なる作品が収録されており[77]、『ユークリッド』【㉛】については、これと同じ内容であった可能性がある。また、❷挿絵付小型傑作集には、その他にも、『暦とアストロラーベの知識 *Maʿrifat dar Taqwīm wa Usturlāb*』、そして、ジャムシード・ブン・マスウード・ブン・マフムード Jamshīd b. Masʿūd b. Maḥmūd（通称ギヤース Ghiyāth）がイスカンダルのために書き下ろした『天文学の知識に関する梗概』が収録されており[78]、これらの作品が❶挿絵付大型傑作集の目次に名前だけ登場する作品に比定できる可能性もある。

このようにイスカンダルに献呈された傑作集では、天文学の教養については、覚えやすさのために韻文形式で編ま

れた簡潔なものから、散文形式で編まれた簡潔なもの、そして、散文形式で編まれた大部なものに到るまで、様々な作品が収録されている。ここからは、イスカンダルの天文学に対する強い関心がうかがえるだろう。

生物学の教養

❶挿絵付大型傑作集の天文学関係の作品の最後には、無名氏『獣医学の知識に関する梗概 *Mukhtaṣar fī ʿIlm-i Bayṭara*』【㉔a】と無名氏『鷹書 *Bāz-nāma*』【㉔b】という、簡潔な生物学に関係する作品が収録されている。前者については、❷挿絵付小型傑作集の中に、そのテクストには異同が見られるものの、同じ内容の作品が確認できる。[79]

歴史学の教養

❶挿絵付大型傑作集の散文の部の後半部は、歴史学と医学の作品が中心になっており、そのテクストはリスボン LA161 本の第二分冊に収録されている。その本文の冒頭を飾るのが、ハムド・アッラー・ムスタウフィー Ḥamd Allāh Mustawfī（一三四四以降没）『選史 *Tārīkh-i Guzīda*』【㉖】[80]である。『選史』は、一三二九／三〇年にイルハーン朝宰相ギヤース・アッディーン・ラシーディー Ghiyāth al-Dīn Rashīdī（一三三六没）に献呈されたペルシア語普遍史書である。縮約版が収録される作品が多いこの傑作集において、『選史』については、ほぼ全文が収録されている。そのテクストは、第二三五葉裏面の本文部分に始まり第三二五葉裏面まで続き、その続きが、最初の第二三五葉裏面の欄外余白部分に斜め書きで記されている。そして、その文章が欄外に斜め書きされる形で続いていき、第二九四葉裏面に到るという形になっている。つまり、本文記事も欄外余白記事も『選史』の記事という紙面の使い方がなされているのである（前掲図四参照）。また、この『選史』には、七枚の挿絵が挿入されており、傑作集に収録される作品の中でも特に見栄えのよい作りになっている。[81]この『選史』の後には、短いアブラハムの伝記が挿入されている。

ティムール朝時代に好評を博したペルシア語普遍史書としては、イルハーン朝宮廷で活躍したラシード・アッディーン Rashīd al-Dīn（一三一八没）『集史 *Jāmiʿ al-Tawārīkh*』が紹介されることが多いが、イスカンダルの宮廷で重要視されていたのは『選史』だったようである。彼に献呈されたペルシア語普遍史書『イスカンダル無名氏の史書』の内容も『集史』よりも『選史』に近い。[82]ちなみに、ムスタウフィーの別著である韻文普遍史書『勝利の書 *Ẓafar-nāma*』のロンドン本（British Library, Ms. Or. 2833）は、一四〇五年三月にマフムード・ブン・サイード・ブン・ア

ブド・アッラー・フサイニー Maḥmūd b. Saʿīd b. ʿAbd Allāh al-Ḥusaynī に、イスタンブル本（Museum of Turkish and Islamic Arts, Ms. 2042）は、一四〇六年三月二二日にハサン・ブン・アブド・アッラー・カーリー Ḥasan b. ʿAbd Allāh al-Qārī によって書写されたものである。[83] この二人の写字生はその名前からおじと甥の関係にあったようだが、前者は、イスカンダルに献呈されたとされる前述の挿絵付傑作集ロンドン Or2780 本の写字生の兄弟にあたる。ちなみに、ロンドン Or2780 本の写字生は、イスカンダルの死後、ファールス地方を支配した、シャー・ルフの息子イブラーヒーム・スルターン（一四三五没）のために一四二〇年三／四月に書写された『選史』ミュンヘン本（Bavarian State Library, Ms. Cod. Pers. 205）の写字生でもある。ファールス地方で、ムスタウフィーの諸著作の豪華装飾手稿本が精力的に作成されていたことは、ペルシア語文化圏における歴史叙述の伝統を考える上で、重要な示唆を与えてくれる。

また、❷挿絵付小型傑作集にも歴史書が一冊収録されているが、それは、簡潔なペルシア語普遍史書、バイダーウィー Bayḍāwī（一三一六／七没）『歴史の秩序 *Niẓām al-Tawārīkh*』（一二七五年）の縮約版であり、やはり『集史』ではない。[85]

百科事典的教養

目次に登場する『真珠の王冠の法学』【㉗】という書名は、イルハーン朝時代に活躍し幅広い分野で著作を遺したクトゥブ・アッディーン・シーラーズィー Quṭb al-Dīn Shīrāzī（一三一一没）による百科事典『真珠の王冠 *Durrat al-Tāj*』のことで、その跋文第二部「ムスリムの諸柱」が収録されている。ここでは、第一分冊に収録される『礼拝入門』【⑦b】と同様に、信仰儀礼について簡潔に説明されている。この『真珠の王冠』については、イスカンダルのために一四一〇年頃に書写された手稿本（私蔵）も残されており、[86] その他の記述についても必要とされていたことが確認できる。さらに、目次には『驚異の贈物 *Tuḥfat al-Gharāyib*』【㉟】という書名が確認できるが、この部分のテクストは存在していない。ただし、同じ書名の作品が、❷挿絵付小型傑作集に収録されている。もしこの作品のことであれば、その内容は、一一世紀に活躍したムハンマド・タバリー Muḥammad Ṭabarī（生没年不詳）のペルシア語博物誌のことである。[87]

医学の教養

第二分冊の後半部の本文部分の中心を占めるテクストは、ホラズムシャー朝（一〇九七―一二三一）宮廷に仕え

た医師ジュルジャーニー Jurjānī（一一三六没）によるペルシア語医学書『医学の目的 *Aghrāḍ-i Ṭibb*』【㉘[88]】である。ちなみに、冒頭のメダイヨン装飾にイスカンダルの名前が書かれた『医学の目的』単独のパリ本（National Library, Ms. Suppl. persan 1963）も残されており[89]、イスカンダルがこの作品をいかに好んでいたのかがうかがえる。❷挿絵付小型傑作集にも医学書が一点収録されているが、それも同じ著者ジュルジャーニーによる医学書『アラーの小論 *Khuffī-yi ʿAlāʾī*』である[90]。ペルシア語文化圏におけるジュルジャーニーのペルシア語医学書の需要の大きさがうかがえるが、興味深いのは、彼による最も大部な医学書『ホラズムシャーの貯蔵庫 *Dhakhīra-yi Khwārazmshāhī*』の名前が登場しないことである。包括的で大部な作品よりも、縮約版で簡便な入門書の方が好まれていたようである。

錬金術の教養

第二分冊には、錬金術関連の短い作品が二つ掲載されている。無名氏『錬金術に関する論文 *Risāla dar Iksīr*』【㉙】と『錬金薬液の技術 *Ṣanʿat-i Iksīr*』【㉚】である。後者は、アブー・バクル・ラーズィー Abū Bakr Rāzī（九二五あるいは九三二没）のアラビア語著作の翻訳だと考えられる。さらに、目次にはないが、この後に無名氏『鉱石の書 *Kitāb-i Jawāhir-nāma*』[91]という錬金術に関連する鉱物学の著作も収録されている[92]。興味深いことに、❷挿絵付小型傑作集では、両作品とは別の、イスカンダルのために作成された短い著作が収録されており（無名氏『赤い硫黄に関する論文 *Risāla-yi Kibrīt-i Aḥmar*』とギヤース・キルマーニー Ghiyāth Kirmānī『イスカンダルの鏡 *Miʾāt-i Sikandarī*』[93]）、イスカンダルはこの分野についても強い関心を持っていたようである。

ペルシア語の教養

第二分冊の最後には、ペルシア語学習のための簡潔な文献が収録されている。『ペルシア語辞典 *Lughat-i Furs*』【㊱】は、アサディー・トゥースィー Asadī Ṭūsī（一〇七二／三頃没）が著した現存する最古のペルシア語ペルシア語辞典である。アラビア語アラビア語辞典の特徴を受け継ぎ、語頭ではなく語尾の文字の順番に配列されているのが特徴で、詩を詠む際に脚韻を揃える際に有用な形式を備えている[94]。続く『韻律学に関する梗概 *Mukhtaṣar dar ʿIlm-i ʿAruḍ*』【㊲】は、ホラズムシャー朝の宮廷詩人ラシード・アッディーン・ワトワート Rashīd al-Dīn Waṭwāṭ（一一八二／三没）によるペルシア語修辞学書『魔法の園 *Ḥadāyiq al-Siḥr*』[95]の縮約版である。先行研究ではワトワート本人の著作に比定

されるが[96]、この作品の序文の内容からは、後世の著者による、イスカンダルのために新しく作成された縮約版か、既に流布していた縮約版であると考えられる。

六　おわりに

本稿では、ムスリム諸王朝の君主たちによる学芸保護と、彼らにとっての学知の在り方の一端を明らかにするために、その象徴的事例としてしばしば取り上げられるティムール朝の王子イスカンダル・スルターンに献呈された傑作集の内容の分析を、「美術作品」としてではなく「学術作品」という捉え方をしつつ行った。その結果、傑作集には、形式的には、韻文と散文の別を問わず、文学、法学、天文学、生物学、歴史学、医学、修辞学など様々な分野の作品が収録されていることが確認された。その過程で、先行研究で誤って比定されていた幾つかの作品についての正確な情報を示すことができた。ペルシア語文化圏で勃興した王朝の君主として重要なペルシア語詩やペルシア語修辞学の知識だけではなく、法学や歴史学、そして、天文学や医学にまでその知識の幅は広がっていた。

先行研究では、傑作集に対する評価として、ティムール朝の王族に必要な知識を涵養するものという鑑文学作品的役割[97]と、あらゆる学知を統括する偉大な君主としての正当性を示すものという政治的役割[98]が強調されてきた。もちろん幅広い学知を統括し、著名な知識人たちを庇護していること、また、（時に自らの姿を意識した）挿絵を含む豪華な手稿本を作成させ保有していることは、ムスリム諸王朝の君主の権威付けには必要不可欠で、これら二つの役割があったという指摘は説得的である。ただし、その中で、必ずしも全ての分野の知識が網羅的に取り上げられているわけではなく、取り上げられている分野の文献についても、その質や量が一定ではないということには注意する必要があるだろう。そこからは、イスカンダルの嗜好やイスカンダルの得意不得意を読み取ることができるのである。宗教的嗜好についても、明らかなシーア派への傾倒を確認できる。また、天文学作品については、質と量ともに様々な性格の作品が収録されており、彼の天文学に対する強い関心がうかがえる。また、イスラーム法を施行するムスリム諸王朝の君主にとって重要だと考えられる、イスラーム法学や神学に属する作品が収録されていることが期待されるが、法学書としてここで登場するのは、初歩的な教義や礼拝についての指南書にすぎない。これは、裏を返せば、イスカンダルがイスラーム教徒としての基本的な教養をいまだ十分に習得していなかったということを意味しているの

かもしれない。

最後に、傑作集を作成する際に、過去の名作をそのまま、あるいは、その縮約版をただ収録するだけではなく、新しい作品を編纂させ、傑作集に組み込んでいたという点にも注意する必要がある。イスカンダルのホロスコープが含まれる天文学書『吉兆なる誕生と暦』、自らの名前が題名に付された錬金術書『イスカンダルの鏡』は、まさに、イスカンダルのために新しく書き下ろされた作品にあたる。傑作集を作成する際に、どうしても過去の名作からは補えない必要な知識が生じてくる。そういったものについては、イスカンダルの宮廷に仕えた知識人たちがその制作にあたったのである。このような作品の多くは著者名も作品名も不明で、後世に単独の作品として書写されなかった場合、傑作集の一部として見落とされる場合も多かった。しかし、ここで補われた作品こそが、その宮廷でその為政者が必要とした知識を明示しているのである。傑作集に含まれる書き下ろし作品の分析は、ペルシア語文化圏研究に新しい史料的可能性を提示するものとなるであろう[99]。

傑作集に収録される作品そのものには、傑作集が作成された時代の歴史を再構成する材料は多く含まれていない場合が多い。しかし、本稿で論じてきたように、傑作集は、それがどのような目的で作成されたのか、また、どのように使用されていたのかについて検討することで、その作成者にとっての学知の在り方を考える有力な材料になり得るのである。

【付記】本稿は、JSPS 科研費 16K16922、20K13193 による研究成果の一部である。

註

（1）D. J. Roxburgh, “Jong,” *Encyclopædia Iranica*.

（2）Abū al-Majd Muḥammad b. Masʿūd Tabrīzī, *Safīna-yi Tabrīz*, ed. ʿA. Ḥāʾirī & N. Pūrjawādī, Tehran: Markaz-i Nashr-i Dānishgāhī, 1381kh.

（3）例えば、A. A. Seyed-Gohrab & S. McGlinn (eds.), *The Treasury of Tabriz: The Great Il-Khanid Compendium*, Amsterdam & West Lafayette: Rozenberg Publishers & Purdue University Press, 2007.

（4）R. Pinder-Wilson, “The Pictorial Arts in the Timurid Period,” in P. Jackson & L. Lockhart (eds.), *The Cambridge History of Iran, Vol. 6: The Timurid and Safavid Periods*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986, pp. 843–876.

（5）例えば、Y. Āzhand, *Maktab-i Nigārgarī-yi Shīrāz*, Tehran: Intishārāt-i Farhangistān-i Hunar, 1387kh, pp. 165–169; E. Wright, *The Look of the Book: Manuscript Production in Shiraz 1303–1452*, Washington, D. C.: Freer Gallery of Art, 2012, pp. 82–105.

（6）P. P. Soucek, “The Manuscripts of Iskandar Sultan: Structure and Context,” in L. Golombek & M. Subtelny (eds.), *Timurid Art and Culture: Iran and Central Asia in the Fifteenth Century*, Leiden, New York & Köln: E. J. Brill, 1992, pp. 116–131; M. Ghiyāthiyān & Ī. Istūrkinbūm, “Nuskha-ʾī Shāhāna-yi Kitābat-shuda barā-yi Iskandar b. ʿUmar-shaykh: Gulchīn-i Maḥfūẓ dar Mūza-yi Kālūst Gulbankiyān, Kitābkhāna-yi Dānishgāh-i Istānbūl wa Muʾassasa-yi Tārīkh-i Pizishkī-yi Wilkām,” *Āyina-yi Mīrāth*, 67, 1399kh, pp. 55–90.

（7）Wright, *The Look of the Book*, p. 104.

（8）P. P. Soucek はイスカンダルに献呈された手稿本は一一点、イスカンダルの庇護に帰せされる手稿本は六点とするが（Soucek, “The Manuscripts of Iskandar Sultan,” p. 128）、筆者はここに紹介されている手稿本を全て調査できておらず、その妥当性の判断については今後の課題としたい。

（9）P. P. Soucek, “Eskandar Solṭān,” *Encyclopædia Iranica*; P. P. Soucek, “Eskandar b. ʿOmar Šayx b. Timur: A Biography,” *Oriente Moderno*, 15/2, 1996, pp. 73–87; Wright, *The Look of the Book*, pp. 82–105; 川口琢司『ティムール帝国支配層の研究』（北海道大学出版会、二〇〇七年）一二〇—一六三頁。

（10）B. F. Manz, *Power, Politics and Religion in Timurid Iran*, Cambridge: Cambridge University Press, 2007, p. 30.

（11）Soucek, “Eskandar Solṭān”; Soucek, “Eskandar b. ʿOmar Šayx,” p. 85.

（12）Soucek, “Eskandar Solṭān.”

（13）Dawlatshāh Samarqandī, *Tadhkirat al-Shuʿarā*, ed. F. ʿAlāqa, Tehran: Pazhūhishgāh-i ʿUlūm-i Insānī wa Muṭāliʿāt-i Farhangī, 1385kh, p. 668.

（14）G. Saliba, “Kāši, Ḡiāṯ-al-Din,” *Encyclopædia Iranica*.

（15）Dawlatshāh, *Tadhkirat al-Shuʿarā*, p. 658. 彼が詠んだ詩については、Busḥāq Aṭʿima-yi Shīrāzī, *Kulliyāt-i Busḥāq Aṭʿima-yi Shīrāzī*, ed. M. Rastgār Fasāʾī, Tehran: Mīrāth-i Maktūb, 1382kh 参照。

（16）Dawlatshāh, *Tadhkirat al-Shuʿarā*, p. 668.

（17）F. Richard, “Un témoignage inexploité concernant le mécénat d’Eskandar Solṭān à Eṣfahān,” *Oriente Moderno*, 15/2, 1996,

pp. 65–72; İ. E. Binbaş, *Intellectual Networks in Timurid Iran: Sharaf al-Dīn ʻAlī Yazdī and the Islamicate Republic of Letters*, Cambridge: Cambridge University Press, 2016, pp. 89–90.

（18）『イスカンダル無名氏の史書』については、川口『ティムール帝国支配層の研究』一二五―一三五頁；大塚修『普遍史の変貌―ペルシア語文化圏における形成と展開』（名古屋大学出版会、二〇一七年）二九七―三〇二頁参照。この歴史書の著者を前述のムイーン・ナタンズィーとする学説もあるが、史料中でムイーン・ナタンズィーが著したとされているのは、イスカンダルの伝記であり、普遍史書ではない。また、『イスカンダル無名氏の史書』の著者と同じ歴史家が著したとされる『ムイーンの歴史精髄 *Muntakhab al-Tawārīkh-i Muʻīnī*』の題名に付されている「ムイーン」は著者の名前ではなく、この歴史家がイスカンダルの死後に仕えたシャー・ルフの尊称「ムイーン・アッディーン Muʻīn al-Dīn」である可能性が高く（例えば、同時代に編纂されたイブン・イナバ Ibn ʻInaba（一四三五没）による普遍史書『スルターンの諸章 *al-Fuṣūl al-Sulṭānīya*』はティムール朝王子イブラーヒーム・スルターン（一四三五没）に、『ファフルの諸章 *al-Fuṣūl al-Fakhrīya*』はファフル・アッディーン Fakhr al-Dīn というサイイドに献呈されたもので、書名に献呈対象者の名前を入れることが一般的であった）、比定の論拠とはならない（川口『ティムール帝国支配層の研究』一二三頁；大塚『普遍史の変貌』二九八頁註二）。

（19）この手稿本の形状については、筆者による二〇二〇年一月一四日の現物調査に基づく。

（20）この手稿本とほぼ同じ内容を含むニューヨーク本（Metropolitan Museum of Art, Ms. 13.228.19）をイスカンダルに献呈された傑作集とする研究もあるが（Soucek, "The Manuscripts of Iskandar Sultan," p. 128）、これに否定的な意見もある（Wright, *The Look of the Book*, pp. 344–345 n. 164）。実際、この手稿本の目次には、一四一四年生まれの神秘主義詩人ジャーミー Jāmī（一四九二没）の名が確認できるなど、イスカンダル治世の作成とするには、矛盾する箇所も多い。手稿本の大きさが二六・五×一七・七センチメートルであり、その内容も❶挿絵付大型傑作集の一部分と同じであることから（A. S. Cochran, *A Catalogue of the Collection of Persian Manuscripts Including Also Some Turkish and Arabic Presented to the Metropolitan Museum of Art New York*, New York: Columbia University Press, 1914, pp. 79–90）、この手稿本と強い関係が認められる。

（21）F. Keshavarz, *A Descriptive and Analytical Catalogue of Persian Manuscripts in the Library of the Wellcome Institute for the History of Medicine*, London: The Wellcome Institute for the History of Medicine, 1986, pp. 396–399.

（22）T. Hāshimpūr Subḥānī & Ḥ. Āqsū, *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Fārsī-yi Kitābkhāna-yi Dānishgāh-i Istānbūl*, Tehran: Pazhūhishgāh-i ʻUlūm-i Insānī wa Muṭāliʻāt-i Farhangī, 1374kh, pp. 617–618.

（23）Ch. Rieu, *Catalogue of the Persian Manuscripts*, Vol. 2, London: British Museum, 1966, pp. 868–871.

（24）Calouste Gulbenkian Museum, *The Rise of Islamic Art 1869–1939*, Lisbon: Calouste Gulbenkian Museum, 2019, p. 140.

（25）H. Ritter, "Philologika XIV. Farīduddīn ʻAṭṭār. II.," *Oriens*, 11,

1958, pp. 47, 51; Wright, *The Look of the Book*, p. 344 n. 164; Ghiyāthiyān & Istūrkinbūm, "Nuskha-'ī," pp. 56–57 n. 4.

（26）M. T. Ḥusaynī, *Fihrist-i Dastniwīs-hā-yi Fārsī-yi Kitābkhāna-yi Ayāṣūfiyā (Istānbūl)*, Tehran: Kitābkhāna, Mūza wa Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, 1390kh, pp. 459–465. なお先行研究では、同じアヤソフィア分類の手稿本 Ms. Ayasofya 3945 は、イスカンダルに献呈された詩集の傑作集だとされるが（Soucek, "The Manuscripts of Iskandar Sultan," p. 128）、手稿本目録ではオスマン朝第七代君主メフメト二世（在位一四四四―一四四五、一四五一―一四八一）への献呈書だとされる（Ḥusaynī, *Dastniwīs*, pp. 490–491）。

（27）Ch. Rieu, *Supplement to the Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, London: British Museum Publications Ltd., 1977, pp. 133–137.

（28）J. V. S. Wilkinson, *The Chester Beatty Library*: *A Catalogue of the Persian Manuscripts and Miniatures*, Vol. 1, Dublin: Hodges Figgis & Co. Ltd, 1959, pp. 30–32.

（29）Ī. Afshār & M. T. Dānish-pazhūh, *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitābkhāna-yi Millī-yi Malik*, Vol. 9, Tehran: Kitābkhāna-yi Millī-yi Malik, 1371kh, pp. 109–110; E. Sims & S. Tourkin, "The Ark of Poetry (jong-e ash'ar) in the Malek Library in Tehran," in S. Rastegar & A. Vanzan (eds.), *Muraqqa'e Sharqi: Studies in Honor of Peter Chelkowski*, Dogana & Serravalle: AIEP Editore, 2007, pp. 188–194; B. W. Robinson, "Two Illustrated Manuscripts in the Malek Library, Tehran," in P. P. Soucek (ed.), *Content and Context of Visual Arts in the Islamic World*, University Park & London: The Pennsylvania State University Press, 1988, pp. 91–94.

（30）書写の年代と場所については、とりあえず、B. W. Robinson, ""Zenith of His Time": The Painter Pir Ahmad Baghshimali," in Sh. R. Canby(ed.), *Persian Masters: Five Centuries of Painting*, Bombay: Marg Publications, 1990, p. 13 に従った。

（31）F. E. Karatay, *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Farsça Yazmalar Kataloğu*, Istanbul: Topkapı Sarayı Müzesi, 1961, pp. 309–310.

（32）B. Schmitz & Z. A. Desai, *Mughal and Persian Paintings and Illustrated Manuscripts in the Raza Library*, *Rampur*, Rampur & New Delhi: Rampur Raza Library & Indira Gandhi National Centre for the Arts, 2006, pp. 186–187.

（33）Th. W. Lentz & G. D. Lowry, *Timur and the Princely Vision: Persian Art and Culture in the Fifteenth Century*, Los Angeles: Los Angeles Country Museum of Art, 1989, pp. 148–149, 157 n. 112; D. J. Roxburgh, "The Aesthetics of Aggregation: Persian Anthologies of the Fifteenth Century," in O. Graber & C. Robinson (eds.), *Islamic Art and Literature*, Princeton: Markus Wiener Publishers, 2001, pp. 128–130. この傑作集に収録されているティムール家の歴史については、英訳（W. M. Thackston, *A Century of Princes: Sources on Timurid History and Art*, Cambridge, Mass.: The Aga Khan Program for Islamic Architecture, 1989, pp. 237–246）があり、川口『ティムール帝国支配層の研究』一四七―一五七頁で詳細な分析がなされている。

（34）Wright, *The Look of the Book*, p. 344 n. 164.

（35）Lisbon, Ms. LA161, fols. 1b–2a; London, Ms. Add. 27261, fols. 2b–3a; Istanbul, Ms. Ayasofya 3857, fols. 1b–2a.

(36) この作品については、F. Keshavarz, "The Horoscope of Iskandar Sultan," *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1984/2, pp. 197–208; L. P. Elwell-Sutton, "A Royal Tīmūrid Nativity Book," in R. M. Savory & D. A. Agius (eds.), *Logos Islamikos: Studia Islamica in Honorem Georgii Michaelis Wickens*, Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1984, pp. 119–136 参照。

(37) Soucek, "The Manuscripts of Iskandar Sultan," p. 126.

(38) Rieu, *Supplement to the Cataloque of the Persian Manuscripts*, pp. 133–137.

(39) 例えば、Roxburgh, "The Aesthetics of Aggregation," pp. 124–128.

(40) Soucek, "The Manuscripts of Iskandar Sultan," pp. 119–120.

(41) Istanbul, Ms. Ayasofya 3857, fols. 1b–2a.

(42) London, Ms. Add. 27261, fols. 301b–309a, 345b–348a.

(43) Wright, *The Look of the Book*, p. 104.

(44) Lisbon, Ms. LA161, fol. 4b.

(45) ペルシア語の詩形については、黒柳恒男『増補新版ペルシア文芸思潮』（東京外国語大学出版会、二〇二二年）、二五—三二頁参照。

(46) Niẓāmī, *Kulliyāt-i Niẓāmī Ganjawī*, ed. W. Dastgardī, 2 vols, Tehran: Intishārāt-i Nigāh, 1381kh; ニザーミー〔黒柳恒男訳〕『七王妃物語（ハフト・ペイカル）』（平凡社東洋文庫、一九七一年）；ニザーミー〔岡田恵美子訳〕『ホスローとシーリーン』（平凡社東洋文庫、一九七七年）；ニザーミー〔岡田恵美子訳〕『ライラとマジュヌーン』（平凡社東洋文庫、一九八一年）。

(47) ただし、この縮約版が、イスカンダルのために作成されたものなのか、それとも、既に存在していた縮約版を書き写しただけのものなのかは分からない。

(48) London, Ms. Add. 27261, fols. 301b–309a, 3b–294a; Istanbul, Ms. Ayasofya 3857, fols. 2b–273b.

(49) ニザーミーのアレクサンドロス伝承については、山中由里子『アレクサンドロス変相—古代から中世イスラームへ』（名古屋大学出版会、二〇〇九年）一七四—一九五頁参照。

(50) アッタール〔黒柳恒男訳〕『鳥の言葉』（平凡社東洋文庫、二〇一二年）。

(51) Jalāl al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad b. al-Ḥusayn al-Balkhī al-Rūmī, *Mathnawī-yi Ma'nawī*, ed. N. Pūrjawādī, 4 vols, Tehran: Intishārāt-i Amīr-i Kabīr, 1363kh.

(52) Awḥadī, *Dīwān-i Awḥadī Marāghī*, ed. S. Nafīsī, Tehran: Intishārāt-i Amīr Kabīr, 1340kh, pp. 455–479. アウハディーのもう一つの叙事詩形による神秘主義著作『ジャムの盃 *Jām-i Jam*』は、❷挿絵付小型傑作集に収録されている（London, Ms. Add. 27261, fols. 420b–504a）。

(53) Abū al-Majd Majdūd b. Ādam Sanā'ī Ghaznawī, *Ḥadīqat al-Ḥaqīqa wa Sharī'at al-Ṭarīqa*, ed. M. Mudarris Raḍawī, Tehran: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tihrān, 1394kh.

(54) Istanbul, Ms. Ayasofya 3857, fols. 321a–364b, 519a–523a, 513a–518b.

(55) 目次には『グシュタースブの書 *Gushtāsb-nāma*』とあるため、アサディー Asadī（一〇七二／三没）の同名の著作のことであると考えられてきたが（Wright, *The Look of the Book*, pp. 102–103）、その内容は『王書』のグシュタースブ

伝に一致する（Firdawsī, *Shāh-nāma*, ed. Kh. Muṭlaq, Vol. 5, Tehran: Markaz-i Dā'irat al-Ma'ārif-i Buzurg-i Islāmī, 1389kh, pp. 12–76）。

(56) A. Munzawī, *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Fārsī*, Vol. 4, Tehran: Mu'assasa-yi Farhangī-yi Manṭaqa'ī, 1351kh, pp. 2817–2818. 先行研究では、ラシード・アッディーン・ワトワート Rashīd al-Dīn Waṭwāṭ（一一八二／三没）の著作とされているが（Ghiyāthiyān & Istūrkinbūm, "Nuskha-ī," pp. 56–57）、内容は一致しない。

(57) Nāṣir-i Khusraw, *Safar-nāma-yi Ḥakīm Nāṣir-i Khusraw ba Inḍimām-i Rawshanā'ī-nāma wa Sa'ādat-nāma*, ed. M. Ghanī-zāda, Tehran: Intishārāt-i Asāṭīr, 1384kh.

(58) Abū Naṣr Farāhī, *Niṣāb al-Ṣibyān*, ed. Ḥ. Anwarī, Tehran: Markaz-i Nashr-i Dānishgāhī, 1372kh.

(59) Farāhī, *Niṣāb al-Ṣibyān*, p. v.

(60) Farāhī, *Niṣāb al-Ṣibyān*, p. v. 例えば、リスボン LA161 本の後半部には、刊本には存在しない二八～四〇章の記述が含まれている。

(61) Farāhī, *Niṣāb al-Ṣibyān*, pp. 23–24. ファルワルディーンは最初の月で、以降順番に一二番目の月イスファンダールマズまで一二の月名が登場している。

(62) 冒頭の目次では、『最小限度額と韻文型法学書 *Niṣāb wa Manẓūma-yi Fiqh*』となっている。手稿本の作成者がこの二著作を同一の作品と考えていた可能性もあるが、本文では明らかに別著作として扱われている。目次を作成する際に、デザイン上の問題から二つの著作を一つの円の中に書き込んでしまったのであろうか。

(63) M. Dirāyatī, *Fihristwāra-yi Dastniwisht-hā-yi Īrān (Dinā)*, Vol. 9, Tehran: Kitābkhāna, Mūza wa Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, 1389kh, p. 1168. この作品の刊本は確認できていない。

(64) Tehran, Ms. 5932, fols. 1b–6a; Sims & Tourkin, "The Ark of Poetry," p. 188.

(65) Lisbon, Ms. LA161, fol. 88a.

(66) Anon., *Tankīsha*, ed. R. Riḍā-zāda Malik, Tehran: Mīrāth-i Maktūb, 1384kh, pp. 168–211.

(67) London, Ms. Add. 27261, fols. 332b–338b; Tehran, Ms. 5932, fols. 16b–25b; Sims & Tourkin, "The Ark of Poetry," p. 191.

(68) リスボン LA161 本では、この後に異なる書体で、ティムール朝時代に活躍した神秘主義詩人ジャーミー『ユースフとズライハー *Yūsuf wa Zulaykhā*』からの引用が続く（Lisbon, Ms. LA161, fols. 98a–118b）。この作品は、手稿本が成立した一四一一年には存在しておらず、後世の加筆だと考えられる。

(69) サァディー〔沢栄三訳〕『ゴレスターン』（岩波書店、二〇一九年）。

(70) Soucek, "The Manuscripts of Iskandar Sultan," p. 122.

(71) Lisbon, Ms. LA161, fols. 130b–131a.

(72) Soucek, "The Manuscripts of Iskandar Sultan," p. 125. イラーキーの著作とする先行研究もある（Ghiyāthiyān & Istūrkinbūm, "Nuskha-ī," p.83）。

(73) Shahmardān b. Abī al-Khayr Rāzī, *Rawḍat al-Munajjimīn*, ed. J. Ikhwān Zanjānī, Tehran: Mīrāth-i Maktūb, 1384kh.

(74) Naṣīr al-Dīn Ṭūsī, *Zīj-i Īlkhānī*, ed. Y. Bābāpūr & M.

Ghulāmīya, Qom: Majmaʿ-i Dhakhāʾir-i Islāmī, 1391kh.

（75）London, Ms. Add. 27261, fols. 372b–542b.

（76）Karatay, *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Farsça Yazmalar Kataloğu*, p. 88.

（77）London, Ms. Add. 27261, fols. 343a–344a.

（78）London, Ms. Add. 27261, fols. 365b–372a, 340b–342a.

（79）London, Ms. Add. 27261, fols. 396b–398a.

（80）Ḥamd Allāh Mustawfī, *Tārīkh-i Guzīda*, ed. ʿA. Nawāʾī, Tehran: Intishārāt-i Amīr-i Kabīr, 1366kh.

（81）この手稿本は、年記が入っている『選史』の手稿本の中では最も古い。しかし、残念ながら既刊のペルシア語手稿本目録などでは、この傑作集に収録されている『選史』は紹介されてきておらず、今後、『選史』研究で参照すべき手稿本本である。『選史』とその手稿本群については、大塚『普遍史の変貌』二〇三―二一八頁；大塚修『「選史」続編の研究―新出史料『ジャラーイル朝史（選史続編）』を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』八五号、二〇一三年、一七―二〇五頁参照。

（82）大塚『普遍史の変貌』二九九―三〇〇頁。

（83）Ḥamd Allāh Mustawfī, *Ẓafar-nāma*, ed. M. Madāyinī, Vol. 1, Tehran: Pazhūhishgāh-i ʿUlūm-i Insānī wa Muṭāliʿāt-i Farhangī, 1380kh, pp. xxxii–xxxv.

（84）Qāḍī Nāṣir al-Dīn Bayḍāwī, *Niẓām al-Tawārīkh*, ed. M. H. Muḥaddith, Tehran: Bunyād-i Mawqūfāt-i Duktur Maḥmūd Afshār, 1382kh.

（85）London, Ms. Add. 27261, fols. 294b–302a.

（86）Lentz & Lowry, *Timur and the Princely Vision*, pp. 149, 340.

（87）London, Ms. Add. 27261, fols. 302b–332b. この作品の内容については刊本 Muḥammad b. Ayyūb al-Ḥāsib Ṭabarī, *Tuḥfat al-Gharāʾib*, ed. J. Matīnī, Tehran: Kitābkhāna, Mūza wa Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, 1391kh 参照。

（88）Ismāʿīl Jurjānī, *Kitāb al-Aghrāḍ al-Ṭibbīya wa al-Mabāḥith al-ʿAlāʾīya*, Tehran: Intishārāt-i Bunyād-i Farhang-i Īrān, 1345kh.

（89）Paris, National Library, Ms. Suppl. persan 1963, fol. 1a.

（90）London, Ms. Add. 27261, fols. 345b–396b. この作品の内容については刊本 Sayyid Ismāʿīl Jurjānī, *Khuffī-yi ʿAlāʾī*, ed. ʿA Wilāyatī & M. Najmābādī, Tehran: Intishārāt-i Iṭṭilāʿāt, 1369kh 参照。

（91）先行研究では『ニザームの鉱石の書 *Jawāhir-nāma-yi Niẓāmī*』に比定されているが（Ghiyāthiyān & Istūrkinbūm, “Nuskha-ʾī,” p. 84）、刊本（Muḥammad b. Abī al-Barakāt Jawharī Nīshābūrī, *Jawāhir-nāma-yi Niẓāmī*, ed. Ī. Afshār, Tehran: Mīrāth-i Maktūb, 1383kh）の内容とは異なる。序文には、Afḍal al-Dawla wa al-Dīn Ghiyāth al-Islām wa al-Muslimīn という献呈対象者の称号が記されている（Lisbon, Ms. LA161, fol. 429b）。

（92）リスボン LA161 本では、この後に異なる書体で、『馬の書 *Furs-nāma*』の縮約版が続く（Lisbon, Ms. LA161, fols. 435a–439a）が、これは後世の加筆だと考えられる。

（93）London, Ms. Add. 27261, fols. 344b–345a, 398a–403a.

（94）Abū Manṣūr ʿAlī b. Aḥmad Ṭūsī, *Lughat-i Furs*, ed. ʿA. Iqbāl Āshtiyānī, Tehran: Intishārāt-i Asāṭīr, 1390kh.

（95）Rashīd al-Dīn Waṭwāṭ, *Ḥadāyiq al-Siḥr fī Daqāyiq al-Shiʿr*, ed. N. Y. Chalisova, Moscow: Izdatel’stvo <<Nauka>>, 1985.

（96）Ghiyāthiyān & Istūrkinbūm, “Nuskha-ʾī,” p. 84.

(97) Soucek, "The Manuscripts of Iskandar Sultan," p. 128.
(98) Wright, *The Look of the Book*, p. 103.
(99) ティムール朝時代には同様の事例が幾つも存在する。イスカンダルが敵対したシャー・ルフの宮廷で歴史編纂事業に従事したハーフィズ・アブルー Ḥāfiẓ-i Abrū（一四三〇没）は、バルアミー Bal'amī（九九七頃没）『タバリー史翻訳 *Tarjuma-yi Tārīkh-i Ṭabarī*』、ラシード・アッディーン『集史』、シャーミー Shāmī（生没年不詳）『勝利の歴史 *Ẓafar-nāma*』を核に、普遍史の『傑作集 *Majmū'a*』を作成した。その際に、これらの歴史書が扱っていない時代については、自ら、「タバリー史続編」、「クルト朝史」、「タガイテムル、アミール・ワリー、サルバダール政権、アミール・アルグンシャー」、「ラシード史続編」、「ムザッファル朝史」、「勝利の書続編」、「シャー・ルフの歴史」という文章を書き下ろしている（大塚『普遍史の変貌』三二三―三二六頁）。このうち、「ラシード史続編」は刊本 Ḥāfiẓ-i Abrū, *Dhayl-i Jāmi' al-Tawārīkh-i Rashīdī*, ed. Kh. Bayānī, Tehran: Intishārāt-i Anjuman-i Āthār-i Millī, 1350kh が刊行され、ティムール朝時代の重要な一次史料とされている。

（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

別表：挿絵付大型傑作集の目次と内容

	目次に記載された作品名	葉数	内容	分野
①	ニザーミーの五部作からの抜粋 *Muntakhab-i Khamsa-yi Niẓāmī*	4b–115a	ニザーミー（1209 没）『五部作』	文学
②	鳥の言葉からの抜粋 *Muntakhab-i Manṭiq al-Ṭayr*	欄外 4b–38b	アッタール（1221 没）『鳥の言葉』	文学
③	マウラーナー・ルーミーのマスナウィーからの抜粋 *Muntakhab-i Mathnawī-yi Mawlānā Rūmī*	欄外 39a–57 a	ルーミー（1273 没）『マスナウィー』	文学
④	アウハディーの 10 の書簡 *Dah Nāma-yi Awḥadī*	欄外 57b–66a	アウハディー（1338 没）『恋人たちの言葉』	文学
⑤	ナースィル・フスラウの光明の書 *Rawshanāʾī-nāma-yi Nāṣir-i Khusraw*	欄外 67a–74a	ナースィル・フスラウ（1088?没）『光明の書』	文学
⑥	サナーイーの庭園からの抜粋 *Muntakhab-i Ḥadīqa-yi Sanāʾī*	欄外 74b–80a	サナーイー（1134 没）『真理の庭園』	文学
⑦	最小限度額 *Niṣāb*	欄外 80b–84b	アブー・ナスル・ファラーヒー（1242 没）『若者たちの最低限度額』	韻文辞典
	韻文型法学書 *Manẓūma-yi Fiqh*	欄外 85a–88b	シャラフ・アッディーン・ブハーラーイー・フラーサーニー（13 世紀）『礼拝入門』	韻文法学書
⑧	韻文型入門書 *Madkhal-i Manẓūma*	欄外 88b–95a	アブド・アルジャッバール・フジャンディー（13 世紀）『韻文型入門書』	韻文天文学書
⑨	グシュタースブの書 *Gushtāsb-nāma*	115b–122a	フィルダウスィー（1025 没）『王書』	文学
⑩	独創的な思考 *Abkār al-Afkār*	122b–129a	ラーミー・タブリーズィー（1392/3 没）『十章』	文学
⑪	タウシーフを用いた頌詩と技巧的な頌詩 *Qaṣāyid-i Tawshīḥāt wa Maṣnūʿāt*	130b–169b	様々な詩人の詩	文学
⑫	韻律を用いた頌詩と連歌を用いた頌詩 *Qaṣāyid-i ʿArūḍīya wa Tarjīʿāt*	170a–200b	様々な詩人の詩	文学
⑬	抒情詩 *Ghazaliyāt*	201b–234b; 欄外 160a–191b	様々な詩人の詩	文学
⑭	思考の極みからの抜粋 *Muntakhab-i Natāyij al-Afkār*	欄外 130b–159b	様々な詩人の詩	文学
⑮	断片詩 *Muqaṭṭaʿāt*	欄外 192a–210b	様々な詩人の詩	詩
⑯	四行詩 *Rubāʿiyāt*	欄外 211a–229a	様々な詩人の詩	詩
⑰	単体詩 *Mufradāt*	欄外 229b–230a	様々な詩人の詩	詩
	謎かけ *Muʿammayāt*	欄外 230b–234b	様々な詩人の詩	詩
⑱	占星術師たちの庭園 *Rawḍat al-Munajjimīn*	I 1b–108b	シャフマルダーン（11 世紀）『占星術師たちの庭園』	天文学

⑲	年々の規則 *Aḥkām al-Aʿwām*	I 欄外 1b–60b	アラー・ムナッジム（13 世紀）『年々の規則』	天文学
⑳	年々の推移と誕生 *Taḥāwīl-i Sinīn wa Tawālīd*	I 欄外 61a–92a	アフマド・ブン・アブド・アルジャリール・スィジュジー（1020 没）『推移の規則』	天文学
㉑	吉兆なる誕生と暦 *Mawlūd-i Humāyūn wa Taqwīm*	W 1b–80a	イマード・ムナッジム（15 世紀）『吉兆なる誕生と暦』	天文学
㉒	イルハーン天文表 *Zīj-i Īlkhānī*	I 109b–245b	ナスィール・アッディーン・トゥースィー（1274 没）『イルハーン天文表』	天文学
㉓	才能の論証 *Burhān al-Kifāya*	I 欄外 109b–198b	アリー・バクリー（13 世紀）『才能の論証』	天文学
㉔	獣医学 *Bayṭara*	I 欄外 203a	無名氏『獣医学の知識に関する梗概』	生物学
	鷹書 *Bāz-nāma*	I 欄外 203b–210b	無名氏『鷹書』	生物学
㉕	60 の表 *Jadwal-i Sittīn*	I 欄外 199a–202b	無名氏『60 の表』	天文学
㉖	選史 *Tārīkh-i Guzīda*	235b–325b; 欄外 235b–294b	ハムド・アッラー・ムスタウフィー（1344 以降没）『選史』	歴史学
		325b–328a	アブラハムの説話	歴史学
㉗	真珠の王冠の法学 *Fiqh-i Durrat al-Tāj*	欄外 295b–323a	クトゥブ・アッディーン・シーラーズィー（1311 没）『真珠の王冠』	百科事典
㉘	医学の目的 *Aghrāḍ-i Ṭibb*	329b–441b; 欄外 329b–408b	ジュルジャーニー（1136 没）『医学の目的』	医学
㉙	錬金術に関する梗概 *Mukhtaṣar dar Kīmiyā*	欄外 412b–428b	無名氏『錬金術に関する論文』	医学
㉚	錬金薬液の技術 *Ṣanʿat-i Iksīr*	欄外 409b–411b	無名氏『錬金薬液の技術』（ラーズィーの著作の翻訳）	医学
		欄外 429b–435a	無名氏『鉱石の書』	鉱物学
㉛	ユークリッド *Uqlīdus*	L 343a–344a	無名氏『ユークリッドの知識に関する梗概』	天文学
㉜	アルマゲスト *Majistī*			天文学
㉝	規則 *Aḥkām*			天文学
㉞	アブー・マアシャル *Abū Maʿshar*			天文学
㉟	驚異の贈物 *Tuḥfat al-Gharāyib*	L 欄外 302b–332b	ムハンマド・タバリー（11 世紀）『驚異の贈物』	博物誌
㊱	ペルシア語辞典 *Lughāt-i Furs*	欄外 324b–329a	アサディー・トゥースィー（1072/3 頃没）『ペルシア語辞典』	辞典
㊲	韻律学 *ʿArūḍ*	欄外 323b–324b	無名氏『韻律学に関する梗概』（ラシード・アッディーン・ワトワート『魔法の園』の縮約版）	修辞学
㊳	薔薇園からの抜粋 *Sukhanān-i Gulistān*	欄外 95a–97b	サアディー（1292 頃没）『薔薇園』	教訓

＊葉数の項目でその前に何も記していないものはリスボン LA161 本の葉数、I と記したものはイスタンブル F1418 本の葉数、W と記したものはロンドン Per474 本の葉数を意味する。
＊ハイライトを施している作品は目次に書名があるにもかかわらず、挿絵付大型傑作集に収録されていないものを意味する。その中で、挿絵付小型傑作集ロンドン Add27261 本収録の作品に同定できる可能性があるものについては L の記号を付して葉数を記した。

Cultural Patronage and Scholarly Knowledge in the Court of a Timurid Prince: Research on the Anthologies of Iskandar Sulṭān

OTSUKA, Osamu

It is well-known that Iskandar Sulṭān, a prince of the Timurid Dynasty, was one of the most vigorous patrons of manuscript production in the Persianate Societies. His cultural patronage is reflected in the fact that during his short life he had ordered the production of several illustrated anthologies of Persian works in prose and verse, including one of the most renowned masterpieces of Islamic art, "Iskandar Sulṭān's horoscope" preserved in Wellcome Institute, London (Ms. WMS. Per. 474). Although some anthologies have attracted much attention from art historians for their magnificent ornaments and miniatures, their contents have not been comprehensively examined via philological study. This article is a serious philological study of the anthologies of Iskandar Sulṭān, mainly based on his famous illustrated anthology preserved in the Calouste Gulbenkian Museum in Lisbon (Ms. LA 161), whose manuscript catalogues have not yet been published. A close analysis reveals that they include diverse fields of Persian works such as literature, lexicography, Islamic law, poetics, astronomy, biology, history, medicine, alchemy, and mineralogy in both prose and verse style, some of whose titles are identified by this article. They reflect his wide-ranging scholarly interest. As has been noted in previous studies, they highlight Iskandar Sulṭān's vision as a great intellectual. However, he was not equally well-versed on all topics. Notably, his anthologies include not only long, detailed works, but also short, summarized ones, whose titles and authors are often anonymous. Some summarized works seem to be written upon his request, including the alchemical *Mirror of Iskandar*, named after Iskandar Sulṭān. These summarized works are simple to read and may reflect the patron's genuine scholarly interest and his level of knowledge. Although we tend to pay attention to other, more detailed major works, it is also important to examine summarized anonymous works. Anthologies produced in the Persianate Societies, which may encourage the reconsideration of cultural patronage and scholarly knowledge in Muslim dynasties, await detailed study.